

## 関連性体系からみた和洋の社会学用語のズレと“統治志向バイアス”

元武蔵大学 藤田哲司

### 1 目的・方法:社会学用語の移植 (transplant)の際の日本ならではの「時代の要請」としての統治志向バイアスの解明・和洋の用語間での関連性体系の対比と「知識の流通を可能とする基盤」としての『用語辞典』への着目

本報告では本来の西洋概念には含まれていない、明治日本で独自に添加された「ズレ」について光を当てていきたい。その際、セッションのテーマである「知識の流通を可能とする基盤」に対する着目として、西洋の『用語辞典』を取り上げる。例えば、日本においては好ましい意味で用いられることが多かった「近代」に対し、『キーワード辞典 (*Keywords A Vocabulary of Culture and Society*)』のなかでレイモンド・ウィリアムズ [1976] は、“modern”という用語は西洋においては 19 世紀以前には好ましくない意味で用いられていたことを指摘する。「19 世紀以前に現れた用法の大半は、他の時代と比べる文脈で使われた場合には、好ましくない印象を伝えるものであった」。「近代」の「代」は天皇 (皇帝) が統治する時代に由来する「字」で、翻訳の際、西洋と別物の家族国家観が込められた。

### 2 結果・結論:ネガティブな用語が社会的現実影を投げ掛けていることへの注意喚起

「国家」「近代」をはじめとするネガティブな社会学用語が、息の詰まるような 2016 年日本の社会現出に一役かっているのではないだろうか。この問題を明治期に施された“統治志向バイアス”という視座から浮き彫りにしたい。翻訳語には作成時の“時代精神”が反映されているとすれば、中央集権と富国強兵という明治における「時代の要請」が現代日本の社会学においては、かえって足かせ手かせとして働いてしまっている可能性がある。

語の意味内容ばかりではなくその関連語からその語が含み持つニュアンスを推察すると、明治期に造られた社会学用語の多くは「統治に都合が良い」偏向した意味(統治志向バイアス)が知らず知らずのうちに織り込まれているのではないだろうか。たとえば、「家族」や「国家」などを思い浮かべてもらいたい。このような日本の社会学用語の多くは意図的もしくは暗黙のうちに、上からの官製の統治・コントロールバイアスが、明治期に行われた翻訳の際、(その漢字の字義や関連語 (関連性体系 (system of relevance)) の形で) 織り込まれてしまっている。

こうしたネガティブなニュアンスのことばを、その来歴が一瞥されることもなく、あたかも経文のように舶来の高級品として有り難がり再生産をつづけているのが社会学理論を取り巻く状況ではないだろうか。社会学的想像力を織り成す用語 1 つひとつがネガティブな (ペシμισティックで暗く堅苦しい) 明治期の「統合志向」的な磁気を「字義」と「関連語」の形で帯びてしまっている日本の現実そのものを論題化すべきである。研究者がしらすらうちに引きずられている「呪縛」によって、ますます息が詰まるような現実社会の構築を助長してしまっている、そのような循環を解明していきたい。